

書評

Toshiro Matsuda; and Akimi Fujimoto, eds. *Commercial Farming in Thailand: A Study of Sustainable Agricultural Development in Three Regions*. Tokyo: World Planning, 1998, 363p.

農業の発展は、耕地の外延的拡大に始まり、集約化を経て、作物多様化に至ると言われる。この動態は工業化を中心とする経済発展と密接に関係している。本書が対象とするタイを例とするならば、耕地の外延的拡大から集約化への移行は1970年代に始まった。直接的には化学肥料や農薬などの工業製品が普及したからであり、それを農村に流通させるためのインフラや輸送手段が改善されたからである。さらに1980年代後半になると作物多様化が登場した。工業化によって豊かになった都市住民の水産物や畜産物を含む多様な農産物に対する需要が増大し、そのような農産物の生産や加工、流通を支える技術改良が進んだからである。

商業的農業は、以上の過程でどのように変貌したか。集約化の段階までは、商業的農業は少数の作物に特化していた。タイでは、コメとキャッサバやトウモロコシなどの飼料作物であった。これらは、簡単に調整・加工され、海外へ輸出された。未だ農産物の国内市場は十分に大きくなかった。生産や加工においても、市場開拓においても、少数の商品作物への集中が経済的に有利であった。しかし、自給用を除いて少数の作物が大面積で栽培されている状況は、多様な土壌条件や水文環境を考えると決して好ましくない。さらなる農業発展のためには、作物多様化により、それぞれの土地条件を考慮した「適地適作」を実現する必要があった。

工業化を中心とする経済発展により農産物の国内市場が拡大するとともに農産物需要が多様化した結果、コメの単作に代わって種々の作物が導入された。これが、本書が焦点を当てている商業的農業である。そこでは野菜作、果樹作、水産養殖、畜産などが主役となる。本書は、このような高付加価値型の商業的農業に焦点を当てつつ、変貌著しいタイ農業を多角的に分析している。

本書は、1993～95年と1994～96年に実施された2つの商業的農業に関する研究プロジェクトの成果をまとめたものである。国レベルでの各種統計データの収集・分析に加えて、自然環境や経済条件の異なる東北部のコンケン、北部のチェンマイ、中部のノンタブリの3県に属する都市近郊農村と純農村、合計6カ村で300世帯を対象とする質問票調査などの臨地調査を実施し、農業技術や農家経営に関する情報を収集・分析している。このような調査の構図を反映し、本書は、総論と中部、東北部、北部を扱う4部構成になっている。

第1部は、世界的な農産物貿易自由化時代におけるタイ農業政策、灌漑政策とコメ政策の今日的課題、農産物市場の国際化とローカルな農産物流通システムのそれぞれの観点からマクロなレベルでのタイ農業の変容を論じる3本の報告と、土地利用動態と土地所有の商業的農業に与える影響、商業的農業の営農技術と農業経営分析、商業的農業展開のための農民組織、農民による食品加工を地域間比較に基づいて論じる4本の報告からなる。また、第2部は中部農村における土地問題、労働力分析、集約的野菜栽培技術を対象とした3本の報告、第3部は東北部農村における都市化の農家経営に与える影響、農水畜産複合経営、耕作技術を対象とした3本の報告、第4部は北部農村における農村開発における農民組織の役割と農産物販売・流通システムを対象とした2本の報告からなる。

全体を通じて、タイ農業が直面するいくつかの今日的課題が指摘されている。まず近年の商業的農業の拡大に関しては、農家の短期的な経済性に対する判断に基づいており、それが必ずしも「適地適作」ではなく、したがって化学肥料や農薬の過度の投入により環境問題を引き起こす可能性がある。また、これまでのタイからの農産物輸出を支えてきた豊かな自然環境と安価な労働力という枠組みは崩れており、今後も輸出を維持するためには基盤整備、生産・販売組織、農産物流通等の面での政府の積極的な介入が必要となる。さらに、農業政策としては、本書が焦点を当てた比較的優位な条件の地域に展開している商業的農業に加えて、条件不利地の自給農業を重要視する必要がある。最後の指摘は、タイにおける農業政策が、農業生産に重点を置いたものか

ら貧困対策に重点を置いたものへ移行しつつあることを示唆している。これらの指摘のもととなる検証が本書で十分になされているとは言い難い。とはいえ、食糧自給が重要な政策課題とならないタイにおいて、工業化社会の農業のあり方は先達のない課題である。本書はこの課題の重要性を改めて認識させてくれる。

(河野泰之・東南ア研)

Helen Creese. *Pārthāyaṇa: The Journeying of Pārtha, an Eighteenth-century Balinese Kakawin*. Leiden: KITLV Press, 1998, 504p.

本書は、副題が示すように、18世紀にバリで作られたカカウィン作品 *Pārthāyaṇa* (PY) の古ジャワ語本文の校訂に英訳と解説を付したものである。

カカウィンは、インド文化の影響のもとに古ジャワ語で書かれた叙事詩で、散文のパルワと並ぶ古典ジャワ語文学の主要ジャンルである。原則としてインド叙事詩から主題を取り、サンスクリット美文詩に倣った韻律規則と比喩表現を駆使した修辞技巧をもつ。書写には南インド系の文字を使用して貝葉に記録された。9世紀中頃に中ジャワで成立したとされる *Rāmāyaṇa* (RY) を嚆矢として、東ジャワでは15世紀まで創作が続き、15編以上の作品が現存している。

このようにカカウィンはインド化された東南アジア文化の代表であり、そのなかでも最も古く長い文学的伝統の一つであるが、これに劣らず重要ながらしばしば見逃されてきたことは、カカウィンの伝統におけるバリの重要性である。すなわち、ジャワで作られたカカウィンの貝葉写本の多くがイスラーム化したジャワでは失われたにもかかわらず、バリにおいて筆写され、保存されてきたということ、そして、バリにおいて古ジャワ語の知識が継承され、新たなカカウィンが作られてきたということである。

PYのテキストは、これまで15世紀末ないし16世紀初めにジャワで作られたと考えられてきたが、クリースの研究によって、18世紀にバリで作られた作品であること、しかも、PYと称するテキストには18世紀初めと18世紀末に作られた二つのテキストがあり、これまでPYとして知られていたテキス

トは後者であることが明らかにされた。両者を区別するために、前者をPY、後者を、バリで使われていた通称に従って、*Subhadrāwīwāha* (「スバドラーの結婚」SW) と呼ぶことをクリースは提案している。PYの著者は不明であるが、テキスト中に言及される庇護者の名がクルンクン王朝の第2代王に比定されたことによって、テキストの成立は1730年から36年の間と推定されている。SWは、PYのテキストを別の著者が書き直した改訂版である。

バリで作成されたカカウィンの研究は、日本人によるものも含め、すでになされているが、校訂とその英訳が出版されたのは本書が初めてである。古ジャワ語文学の伝統におけるバリの重要性を明らかにしたという点で、本書の刊行がもつ意義はきわめて大きい。クリースは古ジャワ語文学の第一人者スポモのもとで研鑽した研究者であり、周到な校訂、翻訳、綿密な注釈に、研究者に便宜を与える解題、補遺、索引を備えた本書は、オランダ流古ジャワ語文学の系譜を継いだ堅実な業績と評価できる。

本書の原題は「パールタの遍歴」を意味する。パールタは叙事詩『マハーバーラタ』の主要登場人物アルジュナの別名であり、PYの主題は叙事詩第1編にあるアルジュナの巡礼の旅という短いエピソードから取られている。この第1編は10世紀にパルワ作品 *Ādiparwa* (Adp) として古ジャワ語に翻案されており、PYの作者はサンスクリット原典ではなくAdpを素材にして、598頌におよぶ独立した作品を作り上げた。

パーンダワ兄弟の三男アルジュナは、やむを得ない事情で他の兄弟との約束を破った償いのために12年間の巡礼の旅に出る。その過程で、彼は、蛇王の娘やマユラ王国の王女と契り、呪いで鱷に変身させられた天女たちを救う。その後、クリシュナの妹スバドラー（ジャワではスンバドラで知られる）との恋に落ちたアルジュナは、クリシュナの示唆に従って、クシャトリヤにもっともふさわしい略奪婚によってスバドラーを得る。このような物語の筋はAdp中のエピソードをほぼ忠実になぞるものである。

クリースによれば、PYの作者は明らかにAdpを参照している。さらに、PYやSWの言語、韻律、修

辞技巧は、9世紀中頃の中ジャワで作られた規範的カカウィンRYからほとんど逸脱しておらず、カカウインの伝統はその始まりから1000年近くの時間を経た後もバリにおいて息づいていたことがわかる。しかし、この場合、バリ人にとってのカカウインの伝統は、もはやインド世界を志向するものではなく、マジャパヒトによって体现され、18世紀にはすでに失われたヒンドゥー・ジャワ世界を志向するものであったと考えるべきであろう。

しかし、その一方で、クリースは、Adpの中からアルジュナの浪漫的遍歴という短いエピソードをバリ人が繰り返し取り上げている理由として、バリ独自の韻文ジャンルであるキドゥン文学の影響を指摘

している。キドゥンにおいて人気があるパンジ物語では色好みの遍歴する英雄パンジが主人公なのである。

現在、クリースはバリのカカウイン作品などに見られる女性像の分析を進めているところであり、本書に代表される文献学的研究に基づいた歴史社会学的研究の深まりが期待される。東南アジアの前近代の社会像を再構築する際に外来者の記録に頼ることが多い中で、カカウインというジャンル固有のクリシェがあるとはいえ、バリ人自身の作品の中から当時の社会像を読みとる努力は貴重である。

(青山 亨・鹿児島大学多島圏研究センター)